看護学生の臨地実習における感染防止対策に関する意識と実際

吉井　美穂[1)]，八塚　美樹[1)]，塚原　節子[2)]，落合　宏[1)]

1）富山大学医学部看護学科
2）岐阜大学医学部看護学科

要　旨

臨地実習を開始した看護学生が，感染予防対策をどの程度意識しているかという実態を知る目的で調査を行った．その結果，「感染予防対策」は７０％が知っており，「標準予防策」は６０％が知らなかった．また，感染予防対策として「知っていること」「実施していること」「最も大切に思うこと」のいずれも「手洗い」が多く，エビデンスの理解は薄いが，多くの学生が手洗いの重要性を認識し，実習でも意識的に「手洗い」をしているという現実が明らかとなった．

一方，微生物学的知識への問いに関しては，個々の学生間で差がみられ，特に感染経路等に関しては臨地実習を行うにあたり知識の再確認をしていく必要性が示唆された．以上のことより，学生は「感染」という言葉を意識して実習を行ってはいるが，その実際にいたってはいまだ不十分であり，不足している部分を補って実習を進められるような教育方法を今後検討していくことが必要であると考えられた．

キーワード

看護学生，感染予防，教育

はじめに

現在，本大学看護学科では，1年次後期に看護技術（滅菌法，消毒法，滅菌器材の取り扱い）を講義・演習した後，2年次の微生物学で感染管理について講義，そして4年次の臨地実習直前に適切な消毒法の演習を再度行っている．しかしながら，これらの講義・演習に関する評価は各々の担当教員のみに委ねられているため，個々の講義・演習でどこまでの内容を学生がどの程度理解しているのかという共通認識が不十分であり，またそれらの内容を統合した上で実習が行われているのかは定かではない．実際，臨地実習開始直後の学生をみると，「手洗い」でさえも促されて行うことが多く，またメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（methicillin resistant *Staphylococcus aureus*：MRSA）を保菌していると聞いただけで病室に入ることを躊躇しているといった姿勢をたびたび示している．

このようなことからも，一般に院内感染に関連する微生物に直面した際の対応方法や微生物自身の特性といった基礎的知識が、実際に病棟で対処行動として行えるかどうかという実践的知識に結びついているかどうか知る必要があると思われる．

今回，看護学生が感染に対してどこまで意識し，実践を行っているのかを知る目的で調査を行った．

研究方法

1. 対象者および調査時期

口頭で同意の得られた本大学看護学科4年次生61名を対象とし，調査時期は全実習期間のうち実習期間3ヶ月を経過した平成14年8月の夏期休暇に行った．

2. 調査方法

質問紙を用いて①感染予防対策について（標準予防策を知っているか，感染予防対策について知っていること，実習中に実施していること・気をつけていること・大切だと思うこと），②感染症について（MRSA・B型肝炎ウイルス・インフルエンザウイルス・結核菌の感染経路について，感染症患者の血液や体液に暴露された時の対処法について），③手洗いについて（手洗い方法について，どんな時に手洗いをしているか），④その他（環境整備について，感染予防対策への関心，日常的に気をつけていること）という内容について計19項目（自由記載および選択肢）を無記名でアンケート調査し集計した．

結　果

アンケートの回収率は79％で，有効回答率は100％であった．

1. 感染予防対策について

「感染予防対策」という言葉については67人（72％）の学生が知っていると答えていた．しかし，一方で，「標準予防策」という言葉に関しては83人（66％）と半数以上にあたる学生が知らないと答え，聞いたことがある，もしくは知っていると答えた学生にいたっては15人（15％）という結果にとどまった（図1）．

また，「感染予防対策」について1．知っていること，2．実施していること，3．最も大切だと思うことの3つについて自由記載してもらったところ，表1に示すような結果となり，その中でも特に1〜3の全項目において一番多く挙げられていたものは「手洗い」であった．次いで，「含嗽」「手の消毒」「マスク」「手袋」といったことが感染予防対策のために必要な項目として挙げられていた．

2. 感染症について

微生物とその感染症についてどの程度理解しているかを把握する目的で，MRSA，B型肝炎ウイルス，インフルエンザウイルス，結核菌の4つについて質問したところ，多くの学生が理解していたのはB型肝炎ウイルスであった．また，インフルエンザウイルスと結核菌に関しては，主に飛沫感染と空気感染の2経路に大きく分かれて認識されていた．そして病院感染の代表的な菌であるMRSAについてはさらに回答が分かれ，接触感染，飛沫感染，空気感染の3つに分散されるという結果となった（図2）．

3. 手洗いについて

どのような時に手洗いを行っているかという質問に対し，実習中では多くの学生が「患者との接触前後」もしくは「一行為一手洗い」と答えており，実習以外では「帰宅時」が最も多く，「食事前後」と「排泄後」がそれらに続いて多く挙げられていた．

4. その他

学生に，感染予防対策について関心があるかどうかを質問したところ，84％と多くの学生が「関心がある」と答えていた（図3）．また，何を知りたいと望んでいるかという自由記載をみると，「過剰な消毒の弊害」，「擦込み式消毒剤使用時の手洗い」，「MRSA予防において最も効果的なことは何か」といった事項が挙げられていた．

考　察

感染予防対策に関する知識は，全てのケアにおいて基本となるものである[1]．臨地実習では，直接患者に接することから看護学生は既に準医療従事者としての対応を求められる[2]．調査の結果，学生は「感染予防対策」という言葉自体は認識しているものの，その内容については曖昧な点が多くみられた．例えば手指洗浄と手指消毒という「手洗い」方法[3)〜6)]の認識に見られるように，

表1．感染予防対策についての認識内容

知っていること		実施していること		最も大切だと思うこと	
手洗い	36	手洗い	42	手洗い	24
マスク	18	含嗽	8	媒体にならない	3
含嗽	14	手の消毒	6	消毒	3
手の消毒	14	マスク	6	清潔	2
手袋	7	手袋	1	意識	1
清潔操作	5	清潔操作	1	口腔内の清潔	1
ガウンテクニック	4	自分が感染源にならない	1	患者の免疫力の配慮	1
隔離	4			注意力	1
クリーンルーム	3			正しい知識	1
殺菌・消毒	2				1
感染源の除去	2				
空気管理	1				
清潔区域の区別	1				
生花除去	1				
リキャップしない	1				（人）

自由記載（複数回答）

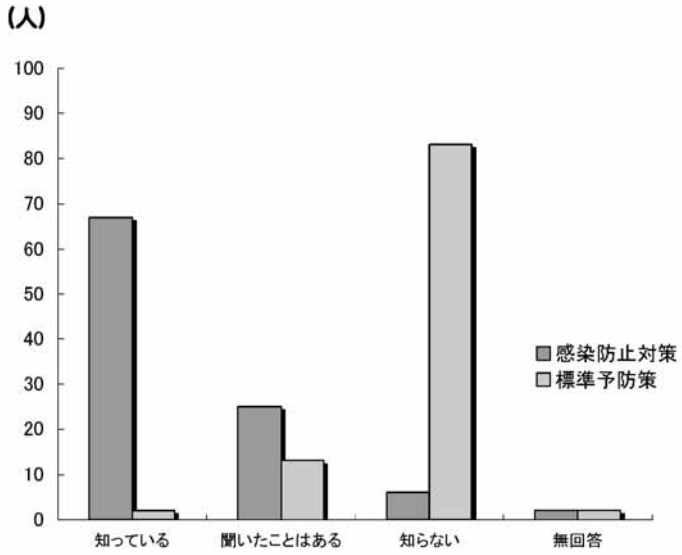

図1.「感染防止対策」および「標準予防策」という言葉の認識

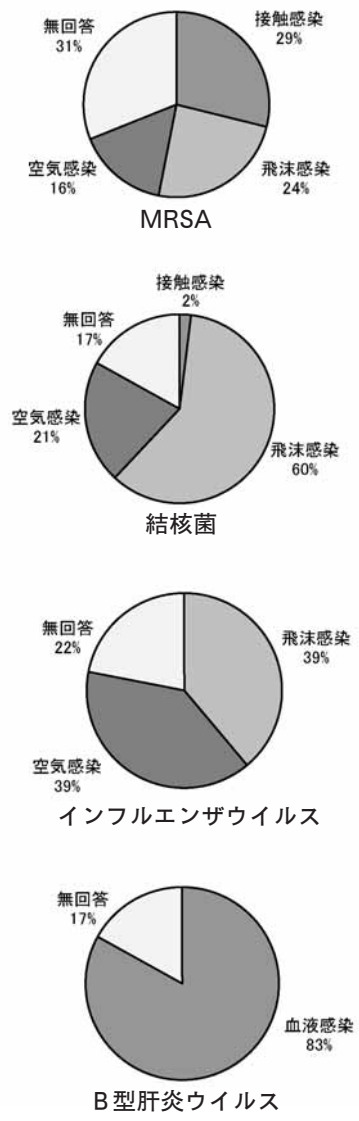

図2．病原微生物別感染経路の理解

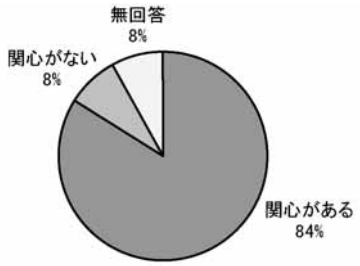

図3．感染防止対策への関心度

m学生は「感染」に対して何らかの行動をとりながらも，その行動は正しい知識のもとに行われていないというのが現状であった．さらにこういった状況から，一般に院内感染に関連する微生物の特性やそれら微生物に直面した際の対応方法といった基礎的知識が乏しく、実際に病棟で自分が行っている行為が正しいのか，何故そうしなければならないのかといった対処行動に結びつけるための実践的知識にいたってはいまだ不十分であるということが予測された．

これらは，授業カリキュラムの構成上，学習してから臨地実習にいたるまでに約1年の期間があり，その間の知識の再確認が十分行われていないこと，また各担当教員間の共通認識が不十分であることによって示された結果であると推測される．しかし，こういった状況の中，「手洗い」に関してだけで学生の意識が高く，方法については問題が残るものの意識的に行えているのは，各領域における教員が臨床という場で頻回に促している成果ではないかと考えられた．この「手洗い」という行為についての質問の結果をみると，多くの学生が手指洗浄と手指消毒の区別がつかないといった現状であったため，最も基本的かつ重要な「手洗い」方法については特に臨地実習前に再度確認していく必要があると思われる．

また，感染症，感染症への対応の仕方については，今回よく知られている微生物についての問いであったにも関わらず，B型肝炎ウイルス以外の全てにおいて知識の混同がみられていた．これらに関しては，臨床において非常に深刻な問題であるため，標準予防策の考え方とともに正しい知識の継続維持が保たれるような方法を今後，検討していくことが課題である．

近年，院内感染や職業感染といったことが大きく取り上げられている．これは，看護学生にとっても無関係ではなく，臨地実習からさらには今後，看護職を担っていく学生にとって大きな問題となるため，基本的知識に加え実践能力向上を視点に入れた学生教育が大切であると考えられる．また，今回の調査では、学生の「感染」に対する関心も高いことが示されたが，これは調査を実習開始後に行ったことで，より身近な内容として捉えることができたためではないかと考えられた。以上のことをふまえると，これまでに学んだ知識を初めて実践する臨地実習の役割は感染予防対策教育においても非常に重要であり，実践ということをよりイメージできるような教育方法の構築さらには学生が知りたいと望んでいる内容に対応した講義・演習の展開の必要性も示唆された．今回の結果をもとに，不十分な点を補いながら，安全かつ適切に実習できるような環境づくりおよび支援が今後必要であると考えられる．

文　献

1）深澤佳代子：看護学生教育における感染予防対策. INFECTION CONTROL　11(3):26-30, 2002.

2）森松信一，柳田純一郎，今西麻樹子，尾崎雅子，松村三千子，十九百君子，他．：看護学生に対する微生物学実習による動機付け．看護教育　44（4）：318-322，2003.

3）洪愛子著：Nursing Muck　感染管理ナーシング．学習研究社，東京，2002.

4）土井英史：手洗いの院内教育．INFECTION CONTROL　9(2):20-23，2000.

5）洪愛子，阿部俊子編：看護ケアにいかす感染予防のエビデンス．医学書院，東京，2004.

6）満田年宏：ナースのための院内感染予防対策 CDCガイドラインを中心に考える基本と実践. 照林社，東京，2003.

Nursing student's knowledge and their own behavior relating to the infection control and prevention during clinical practice

Miho YOSHII [1)], Miki YATSUZUKA [1)],
Setsuko TSUKAHARA [2)], Hiroshi OCHIAI [1)]

1) School of Nursing, Toyama University
2) School of Nursing, Gifu University

Abstract

In oder to know how much knowledge and awareness about infection control in the nursing students, we analyzed the answers on the questionnaire obtained from 60 students at the beginning of clinical practice. Among them, as 70% of students answered to know the word of "infection control", whereas 60% of them did not know the contents of "standard precaution". To questions concerning infection control measures that you should know and practice, and that you think the most important, the most students cited "handwashing". In relation to this fact, it has been clarified that they practice consciously handwashing during the clinical practice. On the other hand, there were considerable differences in knowledge on microbiology depending on individual student. In particular, the knowledge concerning the infection routes was poor and thereby re-education is suggested to be needed. Taking together, it should be emphasized that the clinical practice has a role to teach them the practical and suitable infection control measures case by case.

Key words

Nursing student, Infection control, Education